≪洪水に負けた秀吉、勝った家康≫

１５８９年（天正１８）、多摩川の下流において、本流が北側に流れを変えます。これによって、世田谷区側と川崎側で所領争いが起こり、後北条政権によって調停がなされました。

その直後に、豊臣秀吉が関東へ兵を向けます。本隊は、小田原城に直行し、石田光成をトップとする別動隊は、埼玉県北部にある忍城（おしじょう）を落として小田原城攻めに合流する予定でした。（注１）

石田隊は、忍城に着くや、水攻め堤防を築造します。ところが、１５９０年（天正１９）６月１８日（新暦）、城を孤立させるべく利根川と荒川の水を引き入れたとき、大雨により増水していて洪水がなだれ込み、水攻め堤防が決壊して石田隊に大被害が生じます。

実は、このとき、多摩川も大洪水が発生しており、多摩川の中流部において、本流が北側に流れを変えました。

さらに、小田原の酒匂川（さかわがわ）も洪水が発生していました。小田原城を包囲するため、酒匂川周辺に陣取っていたのが、徳川家康です。このとき、水防に活躍したのが、小泉次太夫（注２）でした。

秀吉による包囲網により疲弊した小田原城は、８月４日（新暦）に降伏します。そして水攻めにも持ちこたえていた忍城は、小田原城落城後、開城されました。

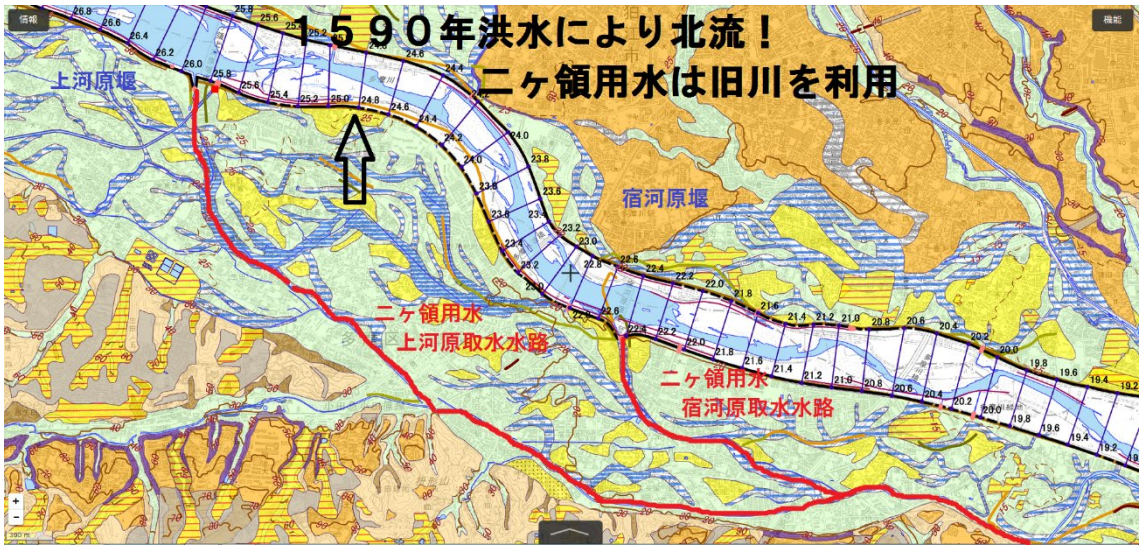
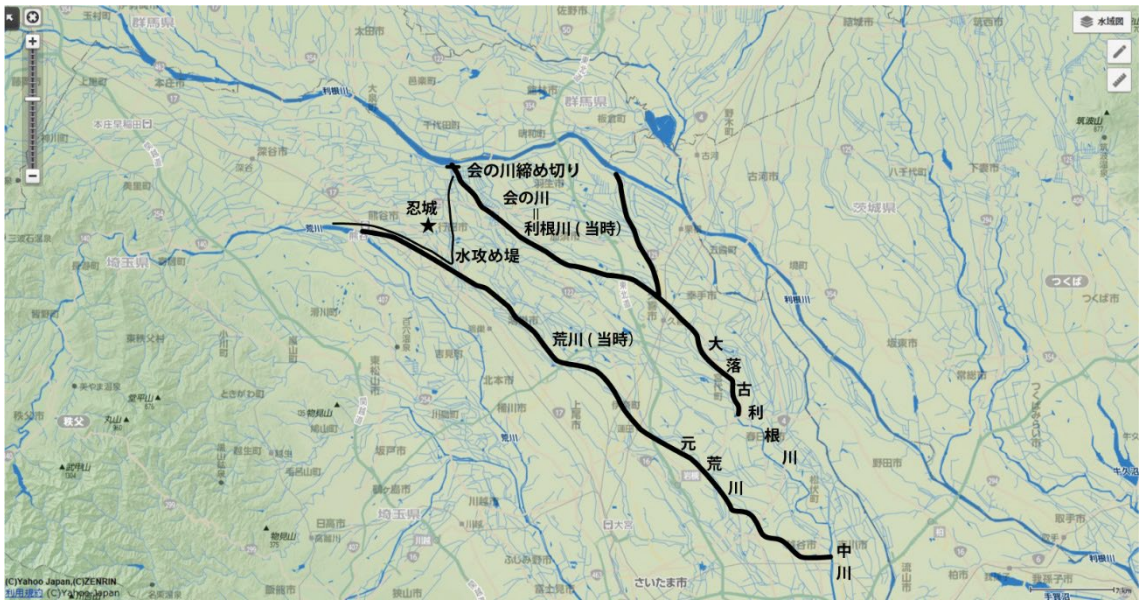
さて、小田原において、家康は秀吉から関東移封を命じられ、８月３０日（新暦）、江戸に入ります。その一方で、小泉次太夫に、多摩川沿川を開発するよう密命します。
次太夫は、目立たない格好で、地元に入り込み、四ケ領用水の計画を練り上げます。北流した多摩川本流をそのままにし、旧河道を利用した水路計画としました。これが二ヶ領用水の上流部分に当ります。

石田隊が攻めた忍城は、膠着状態が続き、小田原城の落城後、開城され、そこに家康の４男松平忠吉を城主に据えます。そして、水攻めのときの復旧工事とし

て利根川の本流をなしていた会の川を締め切ります。（注３）その工事を計画し指揮監督したのが、伊奈忠次（注２）です。

こうして家康は、江戸城の構築と同時に、洪水被害地で土木工事を行い、領民の支持を得るとともに直轄領の安定経営を軌道に乗せたと考えます。

小田原攻めのとき関東地域に降った大雨は、秀吉に凶をもたらし、それを吉に転じた家康が、江戸幕府の礎を磐石のものにしたと言えるでしょう。

注１：このとき、後北条勢の八王子城には、前田利家・上杉景勝が派遣され、攻め滅ぼします。そして、八王子の統治に代官頭として抜擢されたのが、大久保長安です。浅川に長安堤を築き、甲州街道を整備し、現在の八王子の都市骨格を作り上げています。
注２：小泉次太夫は、静岡県富士宮市出身であり、山地から平地における水工を得意とする技術者であり、伊奈忠次は、愛知県矢作川下流域出身であり、低平地における水工を得意とする技術者だったと推察されます。家康は、多摩川の急流に次太夫を、利根川の低平地部の流れに忠次を登用したわけで、適材適所の人事配置と言えるでしょう。
注３：会の川締め切り工事が、利根川東遷の始まりとされていますが、それは後世の歴史家の創作であり、この時点では、東遷に必要な地形や水利データを収集（調査測量）する時間はなかったと考えます。

写真は、①多摩川の旧河道と二ヶ領用水（治水地形分類図に細見作図）、②忍城水攻め（細見作成）、③八王子の石田土手の場所（blog「多摩と入間の雑学的散歩」掲載された現地の看板写真）